

出題分析			
試験時間 90分	配点 100点	大問数 1題	
分量 (昨年比較) [減少 同程度 増加]	難易度変化 (昨年比較) [易化 同程度 難化]		
<p>【概評】</p> <p>出題形式は例年通り本文要約と意見論述の2問構成。本文テーマは、膨大で多様な現代の世界文学とどのように向き合うべきかというもの。近年の文学部の課題文の中でも特に平易な文章で、内容把握はさほど難しくない。ただし、例年同様文章が長大で情報量も多いので、解答に必要な要素を見極め、構成を整えて要約文を作るのは時間がかかる。設問Ⅱの論述テーマは「人間にとって文学を読むとはどのようなことか」。王道的なテーマであり、2012年度の文学部でも「(自分自身の)読書経験を踏まえて」論じる問題が出題されている。また「人間にとって」とあることから、テーマの背景には翻訳技術などのAIの発達があることが伺える。機械に代替されない、文学を読むことの人間特有の意義を、本文とは別の視点から論述する必要がある。総じて、これまでの要約練習、論述対策、過去問演習などの成果があらわれやすい問題だったと言える。</p>			

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
一	本文の要約問題 1問 (300字以上 360字以内)、意見論述問題 1問 (320字以上 400字以内) 出典…沼野充義 「それは君が何をどう読むかだ」 (『現代思想』2024年9月号掲載)	本文はまず、現代の世界文学が膨大かつ多様であり、その総体と向き合うにはかつての「全集」では不十分であることが述べられる。この事態に対して筆者は、従来の系統的な読み方とは違って気の向くままに自由に読み進める「芋づる式の読み方」を提示した後、テキストを緻密に読み込む「精読」か、文化圏を越えた影響関係に着目する「遠読」か、原文で読むか翻訳で読むか等を議論しながら、いずれも(困難な)両立を図ることが重要と繰り返している。最後に、世界文学の多様性のなかには相互理解を可能にする普遍性が存在することを指摘し、世界文学を読むことの意義を述べて結んでいる。要約は以上の構造を念頭に置いて肉付けすればよい。設問Ⅱは文学を読むことの人間的な意味を論じる問題。必ずしも本文の「世界文学」に縛られる必要はないが、筆者の言う多様性と普遍性は論述の手がかりになるだろう。また、AIとの対比を意識して書いてもよいし、いわゆる「文学」以外のテキスト(新聞やネット)との比較も面白いだろう。なお、本を読んで「感動できる」などはすでに本文で書かれているので注意が必要だ。	標準

合格のための学習法

慶應義塾大学文学部の小論文は、文章読解力、自分の考えを作る思考力、それらを限られた字数内でまとめる表現力を試すオーソドックスな問題である。設問意図も把握しやすいので、日頃の小論文の勉強の成果がきちんと反映される問題となっている。対策としては、まず読書をおすすめする。言語、文化、社会、科学など様々なテーマの本を幅広く読み、筆者の問題意識や主張、それに対する自分の考えなどを文章化してみるといいだろう（特に、慶大文学部の小論文で出題される文章は、発刊後一年程度の新書や単行本、文芸誌からの出題が多い）。また、例年本文要約の問題が課されているので、文章を読んで整理し、まとめる練習を積む必要がある。具体的には、学校の教科書や現代文の入試問題で扱った文章を 300～400 字程度で要約するといった練習が効果的だ。その際、単に本文の表現を抜き書きしてまとめるのではなく、自分の言葉を使って簡潔にまとめる訓練をしよう。